

---

# 俺主人公だからネギまの世界行ってきたしww

ひげ独身

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺主人公だからネギまの世界行ってきたしww

### 【Nコード】

N6583T

### 【作者名】

ひげ独身

### 【あらすじ】

買い物帰りにトラックに撥ねられるとういうまさにテンプレどりのことをやってしまった俺はなんとネギまの世界に辿り着いてしまった。しかも東方不敗マスターアジアの力を授かることになったようだ。えいしゃあ、おらあ！！これで原作介入できるってもんよ！ふふふ…どんな敵が来ようがこの俺が一捻りしてやるぜ。なんせ俺は、主人公だからな！（負けフラグ）

あと刹那ちゃんと真名ちゃんと楓ちゃんと千鶴ちゃんは俺の嫁だからね？

注：この作品は、主人公のせいで大分壊れていると思います。  
それがダメな方は読まないことをおススメします。

## プロローグ

「いや〜良い買い物したぜ〜」

とあるプラモ屋で期間限定のやつを買えた俺は大変ご満悦だった

「まさか唯依タン専用の戦術機が売ってるとはな〜しかも最後の一個とは、俺も運が良い」

ウキウキしながら横断歩道を渡っているとトラックがコッチに向かって着ていた。

ガシャーン！！

「あ〜！俺の唯依タンが〜！？」

それが俺の生涯最後の言葉だった。

目が覚める。其処には、俺を覗き込んでいる子供が二人いた。

「目覚めたんか〜良かった〜」

「このちゃんそれ以上近づいたらアカンて」

…俺ってそんなに怪しい？そんなことよりさっきこのちゃんって言ったか？ってことは、ネギまの世界か〜いや〜迂闊だったなあ刹那ッン。

「俺ってそんな怪しい風貌してるかい？」

「それだけ服に血が付着していら怪しいと思いますよ」

あれま、口調を変えてきたか。それよりも服に血がね〜マジでトラックに跳ねられたのか俺

「…そうみたいだな。だったらどっちを行けば森抜けられるかだけ教えてくれ。」

刹那タンに冷たくされたのもあってしよんぼりする俺。

「そんな恰好で降りたら警察に通報されてしまいますよ」

後ろから紳士的な声が聞こえてきた。き、気付かなかった…何か危害を加えようものなら死んでたな。するつもりは無いけど。

「お父さん！！」

「こらこら、このか」

なんて笑いながらこのかを抱き上げる詠春さん

「それでどうやって此処に来たのかな？僕」

それは、俺に言ってるのか？確かに俺は17のガキだが僕と言われ  
るほどじゃ無いはずだ。それにさっきの口振りからして結界みたい  
のが張ってあるのか？だとしたら本山に近いわけだ此処は

「トラックに跳ねられて気付いたら此処に居たんですけど。」  
したらご丁寧にみんな驚いてくれたようだ。

「そうだったんですか…失礼ですが体を少し調べさせて貰います」  
そう言っただ俺の体をベタベタ触り始めた。うんこんなデカいのか  
詠春さんて二メートルはあるぞ…いや待てよ俺が縮んだんじゃない  
か？などと色んなSSに感化されている俺は、思い立ってしまった。  
思ったことはすぐ続行自分の体を見る。

「なん…だと…？」

俺の体は見事に縮んでいた。途端に俺は、目の前が真っ暗になった。  
おそらく俺の理解を超えた事が起きて頭がショートしたのだろう。

「んあ？どこだ…此処？」

気がつくのと辺り一面真っ暗の世界にいた。そしてその奥には一人の  
チャイナ服を着た人物がいた。それを見て俺は、今日何度目かにな  
る驚愕を味わった。

「う、嘘だろ！？なんでここに東方不敗マスターアジアがいるんだ  
！？」

ついフルで呼んじまうほどびっくらこいていた。

「ワシを呼ぶのは貴様か、小僧」

俺が呼んだ？どういこうこっちゃい

「御釈迦様が貴様を助ける為にワシをお呼びになったのだ」

なるその御釈迦様は、俺が助けて欲しいと思ったから呼んだわけ  
か。だったら他のヤツも助けてやれよ…御釈迦様エ…

「それで助けるってどうやるんですかマスターアジア？」

「うむ、なんでもワシの力を全て貴様に捧げれば良いらしい。」  
「つてことは、流派東方不敗が使えるってことか…だったらマラブの世界に行つてB TAを全滅出来るんじゃないだろうか…。」

「では、いくぞー!!小僧流派東方不敗が最終奥義!」

「へ?…ちよ、ちよつとまっ…。」

「石破天驚拳!」

「ぎゃ〜!?!?」

あゝ死んだ俺…

次に目が覚めるとそこは、和風の部屋だった。

「知らない天井だ…」

某新世紀エヴァなんちゃらの碇ホニヤララの真似を試してみたが事態が急変するはずも無く、立ち上がる事にした。

「本当に流派東方不敗が使えるか試してみるか?」

「試すと言つてもどうするか…的が無いから試したくても試せんない。」

「う〜ん」

悩んでいると障子がガラガラと開く音が聞こえる。

「良かった。気がついたようですね。」

「あつ、お騒がせして申し訳ありませんでした。」

「ははは、子供が気にすることじゃ無いですよ」

子供という単語で俺の心は、深く抉られた。分かってたことなんだけぞ…

そつだ詠春さんに頼んでみるか

「あの、すいません。ちよつと試したいことがあるんですけど良いですか?」

「試したい事ですか?…良いですよ着いてきて下さい。」

道中俺は、詠春さんに自己紹介されたので自己紹介をした。

え?俺の名前は何なのかって?そつだなく俺には、72通りの名前があるから何て言えばいいか…という冗談はさておいて東山敏志(ひがしやま、さとし)だ。よろしくな!



## 第一話

「此処で良いですか？」

「ええ良いですよ」

そう言つて人気のない森の中に案内してくれた詠春さんに感謝しながら、手頃な大木に近付く。

「ふう〜」

思うんだけどさ此処で流派東方不敗の技使えなかつたらただの痛い奴だよな。だが、覚悟を決めなくちゃな…！

「俺のこの手が光つて唸る！！お前を倒せと輝き叫ぶ！！」

青く輝く右手を大木目掛けて殴りつける…！

「必殺！！シャイニングフィンガー！！」

すると成人男性の倍は有る大木が木っ端微塵になった。

小説か何だったかでシャイニングフィンガーとゴッドフィンガーをドモンに伝授したってWikiに書いてあつた気がする。だから使えたのか？これは正直賭けだったんだけど

「ふう〜、出来たな」

これでなんとか確証は持てたな。後は、基本的な戦い方だけども大丈夫。鍛えればマスターに近付けるかもな

「さ、さっきのは？」

詠春さんがたじたじになりながら聞いてくる。まあ、さっきのでかりの気を放出したからなんだろうな〜自分ではわからんけど。

「え〜とさっきのは、俺の使つてる流派の技の一つ何ですよ」

「その流派は、なんて言うんです？」

「流派の名は、東方不敗です」

「東方不敗？聞かない名前ですね」

「まあ我流だからしょうがないですよ。」

マスターのとは、言わなかった。だってなんであんな風になったのかなんて俺が説明出来るはずがない。

「そうなんですか。それじゃあ戻りましょうか」

「え？戻るって…」

「屋敷に決まってるでしょう？」

「実は、敏志君の名前を聞いたときそれをある方法を使って調べさせました。」

「…そうですか」

不味いな…俺が異邦人だつてことバレたんじゃないか？

「その結果、敏志君の戸籍は見つかりませんでした。」

「…」

やっぱりか…さてどうするべきかなコイツは

「ですから家に養子として向かい入れようかと」

「…は？」

なんでそうなるんだ！？Why！？なぜ！？

「敏志君には、親戚の人はいないでしょう？」

「確かに、居ませんけど…」

「なら、大丈夫ですね。それじゃあ行きましょうか」

な、なんて強引なんだ余りにも不自然だろ…まさか御釈迦様とかいうやつのお陰か？だとしたら素直に嬉しいな。これで原作に介入する口実も出来たし刹那タンともより良い関係が築けるはずだ…！

「…わかりました。これからよろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる。なんせコレから御世話になるからなこれぐらいは、しないと。

「はい此方こそよろしくお願いします。それと、このか達と友達になつてあげてくれませんか？二人にも男友達は、必要だと思つので。」

「」

えいしやおらあ！！本当にありがたいぜえ詠春さんまじパネエツス。

「はい、わかりました」

何やかんやで屋敷に戻りこのかと刹那タンを居間に集め俺が養子になることを説明してくれた。刹那タンは、始終俺を睨みつけていた。いやあ充分怪しいのは分かってるけどここまで警戒されるとマジへ

こむぜ…。

その後は、何事も無く夕食も頂いた。

「ふっ！ふっ！ふっ！」

食後の軽い運動を理由に庭に出て流派東方不敗のモーションを繰り返していた。鍛錬して解つてたんだけど身体能力は死ぬ前と変わらなかった。だけど俺だつて…俺だつて…！！マスターみたいに強くなれる筈だ…！なんせ俺は、主人公だからな…！！

「…ん？そこに誰か居るのか？」

気配という奴だろうか其処に何かがある感じがする。

「まさか気付くとは思いませんでした。」

其処から出て来たのは…「刹那ちゃん？俺に何かようか？」

「あなたは、どういう目的で此処に来たんですか？」

やっぱりまだ警戒してたか…まああんだけ血だらけの服着てぶっ倒れていたらそうなるか。

「トラックに跳ねられて気付いたらアソコで倒れていたんだよ。」

初めて会ったときと同じことを言うが案の定と言うべきか全然信用していないようだ。

「…ふう〜話し合いがダメなら殴り合いで語ろうか」

「…良いでしょう。ですが私は非力なので武器を使わせていただきます。」

そう言つて妙に長い野太刀を構えてきた

「殺る気満々だな〜刹那ちゃん」

「…行きます！」

俺も遅れて飛び出す。だが先に飛び出しリーチの長い武器を持つてるため先攻してくる。

風を斬る音と共に斬撃が正確に首に迫る

「くっ…」

それをギリギリの所で弾く。空いた懷に思いつ切りボディブローをかます。

「はっ…」

それを許さず腕を叩き斬ろうと迫る。

「おっと、あぶなし」

一旦距離をおこうとするが肉迫して神鳴流が奥義の一つを発動する！！

「斬岩剣！！」

不味い…当たる！！

「まだまだあゝ、俺のこの手が光って唸る！！お前を倒せと輝き叫ぶ」

「必殺！！シャイニングフィンガー！！」

気と気がぶつかり合い気を抜くと吹き飛ばされそうになる

ザクッ

「ぐっ…！？」

パワーを抑えているとはいえ此処までやるとは…。徐々に押されていき

「ぐはっ！？」

吹き飛ばされ何回か地面を転がる。

いてえゝ右手超いてえゝちよつと裂けてんじゃん…どうすんのよこれ…

「此処までやるとは…やりますね。ですが次で詰みですその右手では今度は受け切れませんか？」

刹那タンに黒い影が忍び寄る。刹那タンは、気付いていないのか俺に何か言っってきている。不味い！刹那タンに何かを振り下ろそうとしている。

「間に合えよ…！！」

刹那タンが驚きながら野太刀を構え直してきた。だがそんなことに構っている暇はない！そのまま手を掴み俺が走ってきた方に投げる。

「えっ…痛！」

なんとか間に合った…でも俺が逃げるのは間に合わなかったか…

ドゴォー！

「ゴフツ!？」

俺が元居た場所まで吹き飛ばされる。そ、それにしても、いてえゝ体が壊れそう…

「さ、敏志さん!？大丈夫ですか!？」

「ははは…やつと名前で呼んでくれたか…」  
いやゝ嬉しいなゝ

「そんなこと言ってる場合ですか!！此処は私が…」

その先を言わせる気は無かった。男は女を護るものだからボロボロの体を引きずりながら立ち上がる。

「見てろ刹那ちゃん。これから流派東方不敗の奥義を見せてやる」  
体に気を集めて俺は叫ぶ。数は二十、種別は、鬼ふっ直ぐに片付けやる。なんせ俺は主人公だからな!

「超級霸王電影弾!！」

刹那タンが驚いた顔をしてる。ふむ刹那タンにも手伝って貰うか

「撃て!！刹那!！」

「は、はいいいいいい!！」

ドガアアン

俺はそのまま敵陣の中に突撃し、次々倒していく。そのままの勢いで空中に舞い上がり俺は、決めポーズをとりながら叫ぶ!！

「爆発!！」

一度は、言ってみたかったんだよねゝこの台詞。ここまでは良かったんだ。本当にここまでは…

「どおうわー!！!！!？」

空中に居るのを忘れてどうやって着地すべきか完全に失念していた。あゝもう間に合わないゝどうか俺が死にませんようにゝ

バキィ!！

「アーボン!！!？」

足が…おれ…た…

「さ、敏志さん!大丈夫ですか!？」

「は、ははは…痛いですめちやくそ痛いです…」

あゝやべ…泣いちゃうかも。それと意識が朦朧としてきた。まさか俺の主人公タイムが1日しか保たないなんて…  
なんて思ってるよ

「大丈夫ですか。二人とも」

詠春さん！キタこれで勝つる！…いや何に？

詠春さんが来たことで気が抜けたのか気づけば俺は、重い目蓋を閉じていた。

それにしても俺1日でどんだけ気絶してんだよと自分の事ながら呆れるのだった

## 第二話

光の眩しさに目を開ける。そこは、一回目に気絶したときにあてがわれた部屋だった。どうやらそのまま朝まで起きなかったようだ。

「そういえば体の痛みがない。右手も裂けてないし」

治癒魔法って奴ですか。…あれ？此処って魔法使い居たっけ？

ガラガラ

ガラガラと障子を開ける音が聞こえたからそつちに顔を向けると

「目を覚まされたんですね」

刹那タンが正座しながら聞いてきた。

「うん、おはよう。刹那ちゃん」

それにしても刹那タンの雰囲気が変わったな〜でも何が変わったんだろ？う〜ん…ああそうか！！

「刹那ちゃん」

「はい、何ですか？」

「やっぱり刹那ちゃんには、笑顔が似合うよ」

そう刹那タンが笑顔なのだ。昨日は見せてくれなかった笑顔を向けてくれている。それだけで俺のテンションは上がり心臓の鼓動がバクバクいつてきている。

「あ、ありがとうございます…ごさい…ます…」

顔を真っ赤にしながらお礼を言ってきた。くう〜刹那タン可愛すぎる…！！「刹那タ…じゃなくて刹那ちゃんは、可愛いな」

なでなでと刹那タンの頭を撫でる。それにしても危なかったな…危うく刹那タンって言うところだった。

「あう…そ、そうでした。長が目を覚ましたら連れてきて下さいって伝えに来たんですした。」

「ん、わかった。悪いけど刹那ちゃん案内してくれるかい」

「はい！」

刹那タンが元気に答えてくれた。どうでもいいんだけどさ鏡を見る

たびに俺が子供になつてるのを嫌でも痛感させられる。このかは接点が少ないな。もつと積極的にやるべきかな？出来るかどうかは別として…

なんて物思いにふけていると

「着きましたよ」

「おう」

「あれ？刹那ちゃん行かないのか？」

「はい、呼ばれてるのは敏志さんだけですから」

「そうなのか」

刹那タンのナビゲーションに感謝しながら詠春さんが待っているだろう部屋に入る

「失礼します」

気分は校長室に入る生徒だなこりゃ

「来たようですね」

「この子がそうかの？婿殿」

「はいそうです」

な…なんで学園長が此処にいるんですかー！！？

「ま、まさか俺を治癒魔法で直してくれたのは貴方ですか？」

と言うかコレは確定だな。でもそんな事より重大なのは学園長が俺の記憶を見たのか？という事だ。もし見たなら今の俺と記憶の俺とで矛盾が生じ疑惑を向けてくるだろう。

「そうじゃ。それと記憶も見せて貰ったぞい。東山敏志君」

背中に嫌な汗が流れる。どうするどうするどうする…一体どうすればいいんだ。駄目だ何も浮かばない…もうおしまいだ…

「まあまあそう悲観せんとも大丈夫じゃぞ？何も取って食おうという訳じゃないからのう」

「え？」

真っ白だった頭が段々とクリアになっていくのがわかる。安心したせいだろうか？そして実感した俺は身体的にも精神的にもまだま

だ未熟だと言うことに

「実は敏志君に頼みたい事があつて呼んだんですよ」

詠春さんが割つて入つてきた。それにしても頼みたいことつてなんだ？

「はい、実は敏志君には旅に出て貰おうと思ひまして」

「旅？」

「はい敏志君も気付いているとは思いますが貴方は、とても弱い人です。」

弱い…確かにそつだ。俺は余りにも弱すぎる。

「旅に出て色々な物に触れて感じて自分を鍛え上げて行けば敏志君にとつてとても良い経験になると思つたのです。」

「なるほど」

いやあ俺のことを其処まで思つてくれるなんて…涙がちよちよぎれるぜ

「いきなりそんな事を言つても直ぐには返答出来ないでしょう。ですから答えが出たらまた来て下さい。」

「わかりました。…ところでそつちの人は？」

「ああ、危つく忘れる所でした。義父さんお願いします。」

「…酷いことを言うのう婿殿。敏志君、俺の名前は近衛近右衛門、魔帆良学園の学園長をしておる。よろしくの」

「よろしくお願いします」

これで学園長との関係を持てたな。これで後々行動が楽になるといいんだが…

「敏志君、ものは相談なんじゃが」

「なんですか？」

「このかと付き合つてみる気は…」

ドガバキドゴオ！

「はっ…」

し、しまった…つい反射的に怒涛の17コンボを決めてしまった！

「だ、大丈夫ですか！？あゝ一体誰がやったんだ！？」

「さ、敏志君…じゃ…ろ…ガク」

「が、学園長おおおー!？」

やっぱりバレてたか。まあいいや学園長だし

その場を詠春さんに任せて(ただ逃げただけ)刹那タンとこのかを  
探す。何でかつて?好感度アップのためさ!!

「おゝいたいた。おゝい」

すると刹那タンとこのかがコツチを向いて来た。

「おゝ敏志君や。話し終わったん？」

「ああ、それより知ってたんだな詠春さんと話してたの」

「うん、あのなゝせつちゃんかな今敏志さんは長とお話してるでっ  
て教えてくれたんや」

「へゝそうなのか」

「そうなんや。てことでコレやるうな敏志君」

「ゴムボール？」

「ちやうちやう鞠や」

鞠か、俺はてつきりゴムボールかと。ところでさ、関係ないけど  
これはゴムボールを使った簡単なトリックですよ『って二ニコ動  
画にあるとある動画の米に書いてあったよね。ってぼらのサス  
ペンスをやってる場合じゃないだろ俺

「突いたこと無いぞ鞠」

「だったら、うちがお手本見せるからちゃんと見ててな」

そう言つて歌に合わせて鞠を突き始めた。

???わからん。まず歌詞が覚えられん。

「とまあこんな感じや敏志君もやってみ？」

「ああ」

結果は…まあ散々だったとだけ言っておこう。

「ところ敏志君で幾つなん？」

「それは、私も気になります」

俺の歳か…どう考えたって俺の外見は17じゃないしなゝうゝん大

体10歳ぐらいかな？

「10歳だよ」

「へえ〜ウチらより年上なんか〜。だったら敏志君のこと、さどに  
いって呼んでもええ？」

「うん？まあ良いんじゃないかな」

兄か…今まで誰かに兄として慕われた覚えがないから新鮮だぜ

あの後はいろんな事をして遊びましたとき。

今俺は、鬼の大軍を前にしていた。その理由は

「それでは、敏志君：始めて下さい。」

そう俺は訓練を手伝って貰っていたのだ。

「はい！！ガンダムファイター！！レディーゴー！！」

訓練の条件は、東方不敗の奥義を出来るだけ使わないようにすること  
とだった。確かに俺の体を鍛えるなら奥義を使わないに越したこと  
はない

「ハアアアア！！」

拳を繰り出し続ける。だがそれに比例せず鬼の還る数はたかがしれ  
ていた。

「甘いなくにいちゃん。前だけに気配ってたらあかんぞえ」

「くっ…」

いつの間にか後ろに回り込まれていたようだ。棍棒が迫る！

「なんとおおお！！（シー ック調）」

蹴りを数発打ち込む。だが怯ませる程度に終わった。

「ちい！！威力が足りない！！」

「腰が入つとらんで腰が！！」

ブン！！

「アクロー！！」

ポロポロになりながら立ち上がる。既に体は満身創痍だ

「敏志君、今日は此処までにしましょう。」

「まだだ！！まだ終わらんよ！！」

最後の力を振り絞り鬼の大軍に特攻する。だがすぐに大軍に飲み込まれていった

「やれやれムチャをしますね」

そういつて敏志を担ぎ上げ実家に帰るのだった

### 第三話

それから日常的な平和な日々が過ぎていって半年が過ぎた。

詠春さんに相談して旅に出ることを説明する。すると詠春さんは静かに「そうですね」と言ってくれた。刹那タンやこのかには、詠春さんを通して別れを言って貰うつもりだった。だが翌日になって詠春さんは刹那タンとこのかを連れて玄関にやって来た。

「旅に出るなんて本当なん？さどにい」

このかが聞いてくる2人とも今にでも泣きそうだ。止めてくれ貰い泣きしちゃうだろ？

「ああ、そうだよ」

「そっかあ…ならさよならやな」

「それは違うぞこのか」

キョトンとしながらコツチを見て来る。コレは教えねばならない。

あの名言を…！！

「こういう時はなさよならじゃなくてまたねって言うんだよ」

今度は目を見開いてる。表情豊かだよねこのかって

「ふふふ、そうやねまたねさどにい」

「またね敏志さん」

「おうまたな2人とも。詠春さんもまた会いましょう」

「はい。御武運を祈っていますよ。敏志君」

名残惜しいがそろそろ行かなくちゃな…。涙腺の緩い俺は早々に立ち去らなくては。じゃな2人ともネギ君が来る頃にタラバだバター王。

それから七年の歳月が立つ。桜咲刹那も近衛このかも立派に成長した。刹那は、学園長の頼みで学園の警備にこのかは、学園で楽しい日々を過ごしていた。

「ところで桜咲」

グラマラスなとても中学生とは思えない体型をした女子…龍宮真名が話しかけてくる

「なんだ龍宮？」

「最近噂になってることがあるんだが」

「噂？」

「ああ、アジア圏最強を自称する男が最近現れたらしい。」

「アジア圏最強か…ふっ、とんだ小物だな。アジア最強は…」

「敏志さんに決まってるだろう。かい？」

「な、なんで…」

「わかったのかって？そりゃ事ある事に人名が出れば覚えるよ。」

「くっ…」

顔を真っ赤にする刹那、それを面白そうに見る真名。そのときよく聞き慣れた電子音が鳴り響く。

「はい…はい…わかりました。それじゃあ。龍宮学園長が呼んでいる行こう」

「了解」

全く学園長もなかなかにえげつない。一仕事終わった後にすぐ魔帆良に送還とは…少しは休ませてくれよ体が保たないぜ…。っと学園長室に着いたな

コンコン

「開いとるぞ」

「失礼します」

学園長室に入るとぬらりひょん…もとい学園長と眼鏡を掛けたダンディーなオジサマ…高畑・T・タカミチ…がいた。

「久しぶりじゃのう。敏志君」

「はい久しぶりです。一年振りですね」

実を言うと二年ぐらい前に魔帆良学園に寄ったことがある。その時に何故か一年間1-A…今の2-A…の教師をやらされた。断ろう

とすると既に布石をうたれていてなし崩し的に教師をやることになつていた。そういえばみんな元気かな。いや元気か、あいつらが元気無かつたらホントに次の日には槍が降りかねん。

「前に比べて一段と強くなったようだね。敏志君」

「そうですかね？自分ではよく分からないんですけど。」

「雰囲気の前より鋭くなったと言つのかな。とにかくそんな感じがするんだよ。」

「やっぱりすごいな。タカミチさん。マジパネエ」

「気配が2つ？来るのか？」

「誰か来るんですか？」

すると2人とも驚いた顔をしている。

「分かるのかの？」

「はい」

なんでだ？ああ多分、明鏡止水の御陰だな。戦場に居たときに気付いたら水の一滴さえも感じ取れるようになっていた。

コンコン

「失礼します」

来たな。さてなんて言おうか。ああ、あれがいい

「俺が、アジア圏最強の男！！その名も東方……」

「敏志さん！？」

「敏志！？」

「不敗……って刹那ちゃんに真名ちゃんか、2人とも久しぶりだな」

「気配の正体は刹那タンと真名タンだったのか。この時間帯だと学園内を見張っていたのか。いや、働き盛りだね」

「お久しぶりです。まさかこんな所で会えるとは思いませんでした。それよりさっき敏志さんが言ったのって……」

「あゝアジア圏最強の男ってやつ？」

「はい」

「俺のことだよ。それじゃあ改めて紹介させて貰う。俺の名前は東山敏志！！またの名を東方不敗マスターアジアだよろしく！！」

ごめんねマスター貴方の名を語っちゃってでも一度で良いから声高らかに言ってみたかったんだよね！！

「…」

アレ？刹那タンが固まってる？それに真名タンがなぜか笑いを堪えてるのは何故なんだぜ？

「ふふふ…それはね敏志、桜咲がお前のことを…」

「それ以上言うなー！！龍宮！！」

ブン！！

「おつと危ないな。本当のことだろう？」

「五月蠅い！まさかあの噂が敏志さんだったなんて思わなかったんだ！！」って危ない危ない刹那タンこんな所で野太刀を振り回すなよ！？

「ドウドウ刹那ちゃん落ち着け。こんな所で暴れたら悲惨な事になるぞ」

主に修理代的な意味で

「ですがこの女は私の過去を！」

「はいはい分かったから。真名ちゃんも其処までにしておけ」

刹那タンの体を封じながらそんな事を言う。う〜んそれにしても刹那タン良い匂いがするお。ヤバい興奮してきた。本当にヤバい息子が…俺の大事な一人息子がいきり立ちそうだ…！！

「わかり…ました。」

「ふう〜」

や、ヤバかったな今のは、もしもつと長く続いていたら息子を刹那タンのお尻に押し付けてる状態に…ヤバイヤバイまたいきり立ちそうだ自制しないとな。

「所で俺を呼んだ理由は何だったんですか？」

「あ〜忘れるところじゃったわ。実はな敏志君にもう一度教師をやって貰おうと思ってたな」

「何ですか？」

「うむ実はな近タイギリスから新人教師が来ることになっておるん

じゃ。タカミチ君でも構わんのじゃが敏志君も知つとる通り出張が多いじゃろ？そこで代役が必要と思ひ敏志君を呼んだんじゃ。分かつたかの？」

「はい分かりました」

「それと敏志君には、寮長をやつてもらつぞい」

「分かりました。じゃあそろそろ行つても良いですかね？」

「うむ。鍵は渡しておくぞい。案内は桜咲君と龍宮君にしようかの」

「わかりました」

「了解」

「あゝそれと」

ん？何だろうか他に何かあるのか？

「どうじゃろこのかとお見合いを試みる気は…」

「十二王方牌大車併！！」

「ぐふう…！？」

手が滑つてつい技が出てしまつて学園長に当たつた気がするがまあ気のせいだろう。

「それじゃあタカミチさんお先に失礼します。」

「うん気をつけてね」

「行こうぜ。2人とも」

「はい」

「ああ」

どうじない3人も3人だよな。そんなこんなで魔帆良学園をあとにするのだった。

「なあ…本当にこの寮なのか？」

俺の目の前に広がる寮を見て俺は啞然としてしまった

「はい、ここです。」

なんせご丁寧に女子寮と書いてある。あのぬらりひよんめ俺にたい

しての当てつけたか何かか!?!?

「くっ…ぬらりひよんめ給料は倍増しだぞ…!!」

憂鬱な気持ちになりながら女子寮の管理室に向かう。

「それじゃあ2人ともおやすみ」

今の俺はかなりやつれてる事だろうその証拠にほら

「は、はい、おやすみなさい敏志さん」

「あ、ああ、おやすみ敏志」

2人は若干引き気味だ。まあいいさ明日になって挽回してやる。いまはそんな事より愛しのベットで早く寝たいよ

「おやすみ」

「……さい。…きて…さい。」

んゝ眠い。昨日の疲れがとれてないんだもう少し

「起きて下さい。」

目を開ける。目の前に刹那タンがいる。数秒思い出そうと頭を捻る…アレ?

「なんで刹那ちゃんが此処に居るんだ?確かちゃんと鍵閉めた筈なんだけど」

「え…?開いてましたよ?」

ハ?今ナント?………ああ!?思い出した〜確か疲れちゃったもんだから鍵閉めずにそのまま寝ちゃったんだ。自分の事ながら不用心過ぎたな反省。

つかそんな事どうでもよくな?それより問題なのは刹那タンが起こしに来てくれているという今の状態だ!!ヒヤッホーイ!!今日はテンションマックスで逝つてやる!!

「刹那ちゃんありがとう。今日も俺は頑張れるよ」

「?どう致しまして?」

真名タンも数分経つて遠慮なしに管理室に入ってくる。鍵閉まったらどうするつもりだったんだ?。まあそんなこんなで俺達は魔帆良学園に向かったのさ!!



## 第四話

ガシユー

電車を降りる。俺の胃袋がキリキリしてきたのを感じる。その理由は…

視線視線視線視線、大量の視線が俺を見ている。その視線が普通なら胃がこんなにもキリキリはしない

此処が魔帆良学園女子中等部というのが原因なのだ。女子中等部というぐらいなのだから女子が居るわけでも今の時間帯はちょうど魔帆良に在学中の生徒が登校する時間なのだ。…ここまで言えば分かると思うが…あえて言おう！女子の視線だらけであるて！！えっ？一年間教師やったんだから大丈夫だろって？バーロー俺の高校時代は工業だったんだよ！そのせいで女子にたいする耐性は皆無に等しかった。なら何故俺は、刹那タンを筆頭に2・Aと親しくなれたのか？

それは2・Aにたいする愛情のお陰かもしれない

「さあ、そそくさと行こう。そそくさと」

視線から一刻も早く逃れるために刹那タンと真名タンの手をひつつかみ脱兎の如く改札を抜ける

「ふう〜やつと視線の数が減ったな〜」

ん？刹那タンと真名タンの顔が赤いな。熱でもあるのか？いやもしかしたら…

「2人とも、もしかして恥ずかしかったのかい？」

2人ともコクリと顔を縦に振るだけだった。そんなに恥ずかしかったのか悪いことしたな

「ごめんな、2人とも」

「いや（いえ）むしろ嬉しい（です）！！」

なん…だと…？ならば…！！

「よっしゃあ！！なら手繋いで2・Aのクラスに向かおうぜ！！」  
ムツハゝ俺の気分は、正に有頂天だぜ

「そ、それは…恥ずかし…」

言葉を最後まで聞かず2・Aに向かう俺。あゝ刹那タンと真名タンの手が柔らかい…もつと揉み揉みしてやる。

そこで俺は、気付く教室に行くのではなく職員室に行くのだと、くうゝ惜しいが致し方ない

「じゃ俺職員室行くから、遅刻しないようにな」

職員室に着く。いやゝ久しぶりだなゝ先生たちは覚えていてくれるだろうか？

「ん？敏志君じゃないか」

「へ？あゝ新田先生、御無沙汰してます」

新田先生か久しぶりだなゝ相変わらず2・Aに頭を悩ませているのだろうか？いや悩ませているんだらうなゝ。まあそうでなくちゃ2

- Aらしくないんだけど

「今回はどこに？」

「えゝとギアナ高地に3ヶ月いて、残りは麻薬販売してる組織を追ってました。組織は昨日潰してすぐに魔帆良に戻ってきたんですよ」

「そうですね、大変でしたね。でもあまり無茶はいけませんよ。敏志君にもしもの事があったらみんな悲しみますからね」

「肝に命じておきます。」

キーンコーンカーンコーン

「いつけね！？ホームルーム始まっちゃった。それじゃあ俺行きますね」

迂闊気付かないなんて…

ガラガラ

「いやゝごめよゝ来るの遅れちゃったよ」

教室に入り教卓に上る。するとみんなの顔が見える。みんな驚いた顔をしてるな。耳塞いどこ。嵐の前の静けさって言うじゃない？

「……敏志さんだ……!!」「……」

ほらね？てか耳塞いでんのになんでこんなに五月蠅いんだ!?

「う、五月蠅いぞお前ら。もう少しおしとやかにな」

まったく変わらないな。みんな

「それじゃあホームルームを始めます。号令」

「起立、礼」

「まず最初にタカミチさんは、今日は出張でいません。課題はタカミチさんの机の上に置いてあるから係の人は取りに行つてね。あと、俺は数学を担当する事になったからよろしく。」

あとは……う。ん他には無いな。どうしよう。

「あとは、質問コーナーとか設けようかな?どうする?」

「……」「質問したい」「……」

そつかあしたいのかじゃあ

「じゃあ、質問したい人は手上げて」

みんなの手が上がるそれじゃあ……

「千鶴ちゃん」

「はい」

俺の嫁の一人である那覇千鶴タンを名指しした。相変わらず可愛いなあ。

「敏志さんは、今までどこに居たんですか?」

心配したんですよみたいな雰囲気醸し出す千鶴タン

「ギアナ高地で3ヶ月修行して残りは麻薬販売してる組織を追つた」

みんな驚いてるな……まあ無理はないか

「大丈夫なんですか?敏志さん?」

いつの間にか俺に近づき体をまさぐってくる

「ち、千鶴ちゃん?心配してくれるのはありがたいんだけど……お、ゲフンゲフン胸が当たってるんだけど」

プニプニおっぱいが当たってる…だと…？いかん！？俺の息子が勃つ…！？といふかなぜ答えてくれない？溜め息まで吐かれる始末だしなんでさ？

「あゝごほん！ホームルームは此処までにするから。一時間目は数学だから準備しとけよ」

なんとか千鶴タンをやりわり振りほどき教材を準備するために職員室に戻るうとすると

「さとにい久しぶり！」

「さとにい久しぶりやなあ」

明日菜とこのかがやってきたようだ。え？なんで明日菜までさとにいって呼んでんのかって？それはね滞在しているときに世話してたらこうなった。

「元気そうで何よりだよ。2人とも」

「さとにいもね。にしてあまり危険な事に首突っ込まないでよ？いつか死んじゃうわよ？」

「心配してくれるのは嬉しいがな、俺は死なんよ何故なら俺は…」

「主人公だから！！やる？」

「…俺の台詞盗るなよ…このか。」

久しぶりの雑談に花を咲かしていたらもう2人の女の子がやって来た  
「敏志殿、勝負するでござる！」

「私とも勝負するヨロシ！」

長瀬楓タンとクーフェイちゃんが勝負を仕掛けてきた！

「ハッ、小童が！勝てると思っているのか！？」

「勝負！！」

正攻法で攻めてくる気かならば！！

「甘いわ！！酔舞再現江湖デッドリーウェイブ！！」

2人を上回るスピードで接近し連打をかける！！フッフッフ昔の俺じゃないのさ！！

ドガア！！バキィ！！ドゴオ！！

「む、無念…」

「ハッ、小童が出直してこい！つてことで俺は行くから」  
急いで職員室に戻り教材を取り教室に戻る。

授業は、何の変哲もなく進んでいった。エヴァンジェリンがボイコットをしたことを除いては…

キーンコーンカーンコーン

「チャイムが鳴ったかじゃあ今日はここまで。あつ、号令はいいから」

教室を退室する。エヴァンジェリンは今日もあそこに居るんだろうか？まあ行ってみればわかることか…

「相も変わらずボイコットかエヴァンジェリン」

「ん？敏志か」

眠っていたのか眼を擦りながら答える。

「ふつあのクソジジイに嵌められたのか？」

「女子寮の件に関してはな。エヴァンジェリンの用件が済めば次はぬらりひよんだ」

「私の用件というのは授業に出るとかだろ？」

「わかつてるなら…」

「イヤだねめんどくさい。」

「どうしてもか？」

「ああ」

「どうしても？」

「ああ」

「高級茶葉が条件でも？」

「ああ…つて、なにい！？」

笑うな俺、ここで笑えば後が怖いぞ

「…いいだろう。授業に出てやる。ただし！茶葉が切れれば授業には出ないし出るとしても貴様の授業だけだ！」

うっんそう来たかまあエヴァンジェリンからしたら最大の譲歩なんだろうな…

「…今日は、それで勘弁するよ…。それじゃあ俺は学園長室に行くから」

ああ…次は妖怪退治だ…

コンコン

「開いとるぞ」

ガチャ

「ぬらりひょん！覚悟！！」

「何じゃ！？ギヤアアアア！」

「成敗！」

そしてそそくさと学園長室を退室…フツフツ完璧だ…！

ブルブルブル

携帯のコールを伝える機械音が鳴り響く。だれだ？こんな時間に

「はい」

「あゝ敏志君かの？」

「学園長？どうしたんです？」

まさか…俺の撲殺計画がバレたのか？

「あゝ実はの、今日の11時に世界樹に集合して欲しいんじや。敏

志君がどれだけ強くなったか見せて欲しいんじやよ」

「はい、わかりました」

ガチャ

ふう〜良かった。バレなかったようだ

それにしても世界樹に集合か〜てことは、タカミチさんと戦えって事か…いつの間に出張から帰ってたんだあの人は…。あの人と戦うのは初めてだなまあなんとかなら〜ね〜

## 第五話

ザッザッザッザッ

世界樹のあるところに辿り着く、白TシャツにGパンというラフな格好だが雰囲気だけは戦闘用に切り替える。タカミチさんが相手ならふざけた状態で行くのは負けることになる。やるからには勝ちたい。

「来たようじゃの」

「遅くなつて済みませんでした」

森の中から開けた場所に出る。そこには、魔帆良学園にいる全ての魔法使いがいた。

「感覚が前より鋭くなったね。本気つて事かな？」

「ええやるからには勝ちたいんで…」

やはりタカミチさんが相手を務めるのか。学園長に目で合図する  
「うむ、ルールは簡単じゃ先に降参するかワシが負けと判断するまでじゃ。では両者とも構えてくれんかの」

俺は初速を重視して腰を低くしかかかとを少し上げる。  
タカミチさんはポケットに手を入れたまま動かない。

「…準備は出来たようじゃの。では…始め！」

飛び出し俺は叫ぶ！俺自身の開始の合図を…！

「ガンダムファイター…レディーゴー…！」

一歩、二歩、三歩と着々とタカミチさんに近付いていく。

「うおおおおお…！！？」「可笑しい感覚に襲われる。なんだこれは？」

取りあえず何か当たりそうだったので適当に拳を突き出す。

「…っ！？」

思い出した。確かアレってタカミチさんが牽制でよく使う気弾じゃないのか？

「くっ…」

見えはしないが次々と撃ち出されているのが分かる。

「ちい…!」

守りに回ってはジリ貧だ…。

ならば攻勢に出るだけだ!!

「目には目を、歯には歯をだ!! シャイニングショット!、ダーク  
ネスショット!」

両方の手の平から気弾を発射する。

気弾を相殺させながら近付いていく。

あともう少しだ…。

そして射程に入り

「そこ!」

ブン!

拳を突き出したのだが目の前には誰もいなかった。

瞬動を使ったのか? ならば…

「後ろかー!」

「咸卦法!」

「くっ…、俺のこの手が光って唸る!! お前を倒せと輝き叫ぶ!!」  
右手に光を収束させて咸卦法を相殺しようとする!!

「必殺!! シャイニングフィンガー!!」

互いの力と力がぶつかり合いスパークが発生する。だが優位に立っ  
ているのは、タカミチさんの方だった。

「ぐうあああ!!」

優位に立とうとするが圧倒的な力に吹き飛ばされる

「ぐはっ!?!」

更に追い討ちをかけようとタカミチさんが迫る!!

「舐めるなー!」

なんとか地面に足を着き迫り来るタカミチさんを叩き伏さんが為に  
奥義を使う!

「究極! 爆熱けええええん!!」

ゴッドフィンガーとダークネスフィンガーを融合させた技をタカミチさんの咸卦法にぶつける！！

「ハアアアアア！」

「ズアアアアア！」

先程よりも激しい衝突に周りの木々がより一層ざわめきを増す。

「（石破天驚拳を使うべきか？）」

このままでは共倒れになると踏んだ俺は、流派東方不敗が最終奥義、石破天驚拳を使いこの状況を打破しようとした。

だが次の行動に移ろうとすれば、そのスキを突かれて敗北することも同時に分かっていた。

「どうすれば…つく！仕方ないこうなれば死なば諸共だ！！」

石破天驚拳が使えないならこのまま貫き通すまでだ！！

「ダアアアアアアア！」

「くっ…！ハアアアアア！」

「貫け貫け貫けえええ！！」

その願いが叶ったのか咸卦法を打ち破り究極爆熱拳がタカミチさんに当たる！！

ドガアアアアアア！！

「はあはあはあはあ、俺の…勝ちですよ…」

「ああ、僕の…負けだ…」

「そこまで！！！」

世界樹での戦いは学園長の止めの合図で幕を閉じた。

学園長からの用件は、それだけだったようでタカミチさんとの戦いが終わったなら直ぐに解散となった。

ガコン

自販機でな ちゃんのオレンジを買いプルタブをあけ一気に飲む

「グビグビ…ぷは〜おいしい〜。心身ともに疲れた体に染み渡る〜。

「  
近くに置いてあったベンチに座り込む  
「うわ〜凄いなこりゃ」

気付けば白Tシャツがボロボロになっていた。  
しかもGパンも所々裂けてるし…

「Gパンは、ファツシヨンとして使えるけどTシャツは、買い直さ  
なきゃいけないじゃないか。ガチバトルで此処までなるのは予想外  
だったなあ」

犬の遠吠えが夜中に響き渡る

「何時までも此処にいたら警察に補導されるな…帰るか」  
疲れた体を引きずるように女子寮を目指した。

チユンチユン

光が硝子越し射し込んでくる。

溜まらず俺は、目を開ける

「カーテン買おうかな」

ここらへんにあんなのかなそついう店  
ガチャ

「おはようございます」

刹那タンが来たようだ。いや〜毎朝起こしに来てくれるとかなんて  
エロゲ？

てかまたやつちまったああああ！鍵閉め忘れた…もう馬鹿かと…阿  
呆かと…

「オッス、おはよう刹那ちゃん」

う〜ん腹減ったな何か食うか

「刹那ちゃん何か食べてくか？」

「あ、いえ食べてきたので大丈夫です。」

食べてきたのか…てことは、朝食一人で食うのかしかも刹那タンに  
見られながら…ちよつと興奮してきたな。

くっ…こんな事ならもつと早く起きて朝立ち処理をすれば良かった  
…！  
ガチャ

「おはよう敏志」

「おう、おはよう真名ちゃん」

真名タンも来たか。だったら誘うしかないよね!?

「真名ちゃん…」

「敏志さつき学園長から連絡があつてすぐに来るようになつてさ」

「学園長が？わかつた。」

そそくさとスーツに着替えて刹那タンと真名タンを連れて魔帆良に向かつた。

コンコン

「開いとるぞ」

ガチャ

「失礼します」

学園長室に入る。ついでに言つておくと刹那タンと真名タンは教室に行かせた

「急用と聞いて来たんですけど何か事件ですか？」

「まあ事件と言えば事件じゃな。だがその前に言つておこうと思つての。昨日話した新人教師が明日来ることになつたんじゃ」

「…！…そうですか」

ネギ君がついに来るか。これで原作スタートだな。ふふふ…東西南北にいる猛者達とやつと戦うことができる。

「それじゃあ本題に入るかの」

「はい」

「実はの本国で追つていた奴が日本に潜伏していることがわかつたんじゃ」

「!?!? 本当ですか。そいつは、日本のどこに？」

「うむ…それがな魔帆良にいるようなんじゃ場所は特定してある。頼めるかの?」

「はい、やります」

そういうと学園長が引き出しから写真と赤ペンで丸が書かれた地図を渡してきた。

さて…一仕事しますか

「じゃあ早速行つてきます」

「うむ頼むぞ」

「ここかな?」

地図を見て場所が合ってるか確認して合ってることを再確認する

「いつちよ、やるか」

一見寂れた風に見えるビルの中に入る。

タンタンタンタン

とある部屋の中から気配を感じる。

数は…1…2…3…?オイオイ一人じゃないのかよ8人はいるな  
まあ敵ではないが

ガチャ

「ども〜蕎麦屋東山です。ご注文のお品をお届けに来ました」  
まあボケをかましてみるか

「な、なんだテメーは!?!」

椅子に縛られた女子1人、敵7人が…

「た、助けて下さい!!!」

「おう、待つてな。主人公の俺が助けてやるからな」

「アイツを殺せ!!!」

アイツ等が魔法を放ってくる。どうやら魔法使いだったようだ。まあ結果は変わらんが

「当たるわきゃねえだろ!!!」

魔法をバンバン避ける。よし今日は、ギン ナムでLet's goだ!!

「魔法使いは!!魔法世界にいればいいのだ!!」  
近くにいた奴を持ち上げる

「女を泣かすのがそんなに好きかー!!」  
そのままシャイニングフィンガーを叩き込む!

「ぐばあ!!」

「さあ、今度は誰の番だ?」

「ひいひい!!」

「月・光・蝶である!!」

トゥルルルルル

「もしもし、学園長?今終わらせました。それと女子を1人保護しました。…はい…はい…わかりました。それじゃあ」  
通話を終えて携帯を閉じる。

「あの…ありがとうございます。助けていただいて」

「ん、どう致しまして。何も無いようで良かったよ」

助けた女子の緊張を解すために雑談をしていたら

「迎えに来たよ。敏志君」

「タカミチさん?授業は、いいんですか?」

「うん、丁度授業が終わったところだから大丈夫だよ」

それじゃあ行こうかとタカミチさんが促してくれたので気絶した連中を担ぎ上げ女子を魔帆良学園に案内した。

「それじゃあ後お願いします」

学園長室に連れて行った後は俺に出来ることはない。

あとは、魔法使いの仕事なんだから。

そのあとは、2 - A以外のクラスに授業を教えて1日を終えました



## 第六話

「良い朝だ」

ついに…！ついに…！今日は、ネギ君がイギリスからやって来る！  
「それにしてもやっと原作介入か。長かったな。」

ピンポン

お、来たな俺の嫁グレート刹那タン…！

「はいはい開いてますよ」

「おはようございます。敏志さん」

「おはよう。僕のお嫁さん」

「…！ご、御冗談を」

顔を赤らめながら答えてきてくれた。うーん抱きしめたいな。

「ハツハツハ、冗談さ。そんなことより抱きしめて良いですか？」  
冗談って言ったら落ち込んで抱きしめて良いかと聞けば喜んでるふうに見える。アレ？もしかして好感触？

「は、はい…」

お許しが出たか！ダ〜イ〜ブ！

「あ…」

お〜いい匂いがするし温もりがある。全てがパーフェクトだ…！！  
「いい匂いがするな〜刹那ちゃんは」

「は、恥ずかしいです。こんな日が出てる時間から。」

「まったく朝から何をやってるんだい？」

ガチャと扉が開いて真名が呆れながら言ってきた。うむ真名タンにも抱きつきたいな。

「目が語ってるぞ。敏志」

真名タンが顔を赤らめながら言ってきた。もう！刹那タンも真名タンも可愛いんだから！

「ああ、ソーリー。じゃあ、お二人さん行きましようか。」

「ああ」

「はい」

電車から降りて学園を目指して通学している俺＋刹那タン＋真名タンのパーティメンバー。周りからは、未だに奇異の目で見てくる。最初の頃は、慣れなくて腹が痛くなつたのを覚えてる。あの時は胃に穴が空くんじやないかと思つたな。

「先に教室行つてくれ。俺学園長室行つてくるから。」

そついつて学園長室に向かう俺。ふふふ…わくわくしてきたぞ…！

「失礼しまゝす」

「おお～良いタイミングで来たの～敏志君」

学園長が俺に言つてくる。それにつられて明日菜とこのか、そしてネギ君も振り向いてきた。

「さとにい！？ねえ聞いてよ！さとにい」

明日菜がこれでもかと言つた具合に言い寄つてくる。

「まあまあ、明日菜よ。そんなにまくし立てられても困る」

「あ、ごめん。さとにい」

「それで一体どうしたんだ？」

「それがね…」

明日菜とこのかが説明してくる。あ～そついえばそんな事もあつたな。

「なるほどな」

「…話してもいいかの？敏志君」

「はい、いいですよ」

でこれまた説明をうける。

「そうですか。」

ネギ君に向き直る。

「俺は、ネギ君の担当するクラスの副担任をやつてる東山敏志だ。よろしくな。」

「はい！よろしくお願ひします。」

「ちょっとよろしくしないでよ!? さとにい。はあ…ガキは、ウチのクラスの担任になるし…面倒見なくちゃいけないし…はあ…あ」「ネギ君気にせんでええよ。それじゃあ、さとにい教室でな」  
明日菜とこのかは退室していった。

「それで? 学園長他にもあるでしょう?」

「流石じゃのう気づいておったか。」

原作を知らなければ気付かなかったがね。なんて心の中で思う俺であつた。

「ネギ君が魔法使いなのは、敏志君も知っているかの?」

「ええ、といつても今気付いたんですがね。」

「え!? 敏志さんて魔法使いだったんですか!?!」

「いや、俺は気を使う拳法家だよ。それ以上でもそれ以下でもない」「へえ…そうなんですか」

目をキラキラさせながら見てくる。拳法家というのが気を引いたのだろうか? 君は魔法使いだろ?

「さて、そろそろ行くこつぜ。」

「はい!」

教室の前に辿り着いた。え〜とあつたあつた。黒板消しを上手く力モフラージユしてあるな〜。さて被害を被りたくないからネギ君を先に行かせますか。

「さあネギ君。お先にどうぞ」

「はい! わかりました。」

いや〜相変わらず元気だな〜若いつていいね。

そしてテンプレ通り黒板消しにあたる、いろいろカオスなことになる、ア〜。

「大丈夫かいネギ君」

苦笑しながらネギ君に歩み寄る

「あ、敏志さん。おはようございま〜す」

『おはようございま〜す』

「おう、おはよう」

クラスのみんなも元気だな。

それからと言うものいろいろ問題があったが無事に授業が終わった。

このあと教室でネギ君の歓迎会か…楽しみだぜ!!

「お兄様」

「ん？ああ、よう。どうした」

「これからネギ先生の歓迎会をやりますの。良かったらお兄様もと思ひまして」

委員長さんが上目遣いで言ってきた。まあ俺の方が身長が高いからしょうがないけど。身長が190近くまで伸びたときは、歓喜したな。つとんなことより

「いいよ。今から行けばいい？」

「はい、では一緒に行きましょうお兄様。」

そんなこんなで教室に向かうとしますか！え？どこにいるの？  
？職員室で仕事してたんだよ…

やって来ました。駿河の国じゃなくて2-A

教室に入ると既にパーティーが始まっていたのかネギ君を入れてワイワイやっている。近くにいた生徒が

「あつ、敏志さんだ」

なんて言ってきたもんだから視線がコツチに集まってきた。

「パーティー俺も参加させて貰おうと思っただけだダメかな」

「大丈夫です」

そうか大丈夫かなら適当に料理を紙皿に乗つけて食うかな。それにしても敏志さんだ。万目サンダーみたいだよな。「あ、このパーティーは、大人は有料だからね」

「なん…だ。それは本当かライ…もとい朝倉。それとお  
くが俺は17だぞ!？」

あ、楽しいな。なんて思いながら窓際に寄ると

「お、刹那ちゃん」

ぺこりと頭を下げ俺の隣に寄ってきた

「団子どうですか？」

「うーんじゃあ御手洗団子貰おうかな」

そう思つて紙皿に乗つた御手洗団子を手に取るうとしたとき俺はとんでもない事を思いついた。

「どうしたんですか？」

「あーんつてやってくれ」

「ええ！？」

あらまあ顔を真つ赤つかにしてまあ。

「あ、あーんですか？」

「うん」

手がふるふる震えている。しかも顔が前髪で見えない。ぶっ飛ばされる前に謝つたほうが良いよな？

謝ろうとして顔を上げたらなんと刹那タンが御手洗団子を俺に向けてきていた。コレはやつちやつて良いんですよ？

「あーん（パクッ）」

「うーんデリシヤスだな。」

「そ、そうですか…よかつた」

最後にボソツと何か言った気がするけど気のせいかな。ん？

「なんだ、みんな見てたのか？」

「うん！！」

まさか桜咲さんて…キヤー！とか桜咲さんお兄様との恋路…応援しますわ！とかへえーさとにいと桜咲さんてそうだったんだーなどなどいろいろいるな…ピキュリリンと某機動戦士のパイロットである白い悪魔並みの直感が後ろを向くなと警報をかける。だが人は禁忌を犯したく成る者…俺は、後ろを向くことにした。

「…三人とも何やってるんだ？」

そこには、真名タンと楓タンと千鶴タンがそれぞれ団子を俺に突きつけていた。

「…？？」

何でこうなったのか分からんが三人からは、意を決したかのような

気迫が伝わってくる。

『あ、あ〜ん』

「あ〜ん？」

あ〜んってあれか刹那タンとやったやつか。だったら答えは決まってるよね！。

「あ〜ん（パクッ×3）」

うむ美味いな〜…アバロ！！？な、なんだ！？どういうんだ！？

後ろを向くと刹那タンが竹刀（どっからか持ってきた）を持ちながらご立腹のようだった。

「せ、刹那ちゃん？」

「さ、敏志さんの…バカー！！！」

ドカバキバシグシャ！！

そこに残ったのはボロ雑巾のようにボロボロになった俺の姿だった。刹那タンは、怒ってどこかに行ってしまった。何故あんなに怒ってるのか知らんがあとで謝らなければ…

「だ、大丈夫ですか？」

誰かが聞いてきた。誰が言ってるか分からん視界がボヤケてきたせいでなコイツは

「ふ、ふふふあまり調子に乗るものじゃないな…ガクッ」

くそ〜まだイベントあったのに気絶するとは、情け無い。やっぱり欲張りは良くないよね。新たな教訓だな〜。

「ここは…俺の部屋か。誰が運んできたんだ？そんな事より腹減ったな〜なんか飯作るか〜…？置き手紙？」

なんとテーブルの上にサラララップしてある料理と置き手紙があった。「え〜何々『料理を作っておきましたからレンジで温めてお召し上がり下さい那波千鶴』か。いや〜千鶴タンは流石だな〜」

そそくさとテーブルに座りお手手の皺と皺を合わせて幸せになりますか

「いただきます」

うむ美味しい。まさか料理からも母性を感じるとは…あの子は妙に身体的にも精神的にも大人びている所がある。それを気にしているよ。うだがそれも一つの魅力だと思う。俺の好みの話だが…ってそうだな！刹那タンに謝って来なきやな。え〜と9時か、どんだけ寝てんだよ俺…だがまだ大丈夫の筈だ…！！  
食器を水で漬けて急いで刹那タンの部屋に行く。

といつても俺も学園長の策略で女子寮に居るんだが…さて押すか  
ピンポン…ガチャ

「さ、敏志さん」

いかん緊張してきたぞ

「敏志さん？」

「…ごめん！刹那ちゃん」

頭を下げる俺…自業自得だぜ…

「あ…いえ、その…私も済みませんでした。ついカッとなったりして」

「な、なあひとつ聞いて良いか？刹那ちゃん」

「は、はい」

「あの時怒った理由を聞いても良いかい？」

「そ、それは…教えません！」

顔を赤らめながらドアを閉められてしまった。う〜んわからん。まあいいや言いたくないことを無理強いする気無いし。部屋戻ってもう一眠りしよ…

## 第七話

ネギ君が魔帆良にきて、はてさてどれぐらいの時間がたっただろうか？

と呑気な事を考えていたとある日に俺は、学園長に呼ばれていた。

「今日は、どういう要件ですか？まさかまたお見合いの話ですか？  
どうせそうなんだろうな、なんて思いながら学園長に呆れながら聞いてみる。」

「今日は、ちよつと真面目な話をしようと思つての。ネギ君のことじゃ、どうじゃネギ君は、生徒のみんなと馴染めとるかの？」

「かなり良好のようですよ。授業もかなり教え上手だって評判いいですし。」

俺の率直な感想を言つてみた。つか俺もネギ君の英語の授業に立ち合った時とてもわかりやすくてさすが天才児と思わず褒めたぐらいだ。

「ふむ、そうか。ならネギ君にコレを渡してくれるかの？」

「なるほど、正式に先生になれるかどうか試すんですね」

これも原作で得た知識なんだが学園長が驚いてる素振りを見せる。

まあ封筒の中とか見づに当てたんだから当たり前だよな

「相変わらず、勘が良いのう」

「いや、もうすぐで学期末テストですから。そうなのかなって思っただけです。」

ちよつと話して学園長室を後にする。

「さあて、ネギ君は教室にいるかな？」

「お〜い敏志さ〜ん！」

「ん？」

どうやら探す手間が省けたようだ。ネギ君のほうから来てくれた。

「やあネギ君、奇遇だね」

「奇遇だねじゃないですよ！どこ行ってたんですか？」

「ごめんな、ちょっと学園長に呼ばれてな。ホームルーム出れなかった。それと、はいこれ」

封筒を手渡した。だがネギ君が一向に封筒を開けようとしないので聞いてみた

「どうしたい？」

「課題って何でしょう？も、もしかしてドラゴン退治とかだったりして!？」

「ハツハツハツ、ネギ君、君は大人びてみえて子供っぽいんだな」  
思わず可笑しくて笑ってしまった。

流石にカチンときたのかネギ君が怒ってくる

「いやあだつてさ、まだ戦闘の経験もない君にいきなりドラゴンと戦ってこいなんてさ普通に可笑しな話だぜ？」

「うっ、冷静に考えればそうですね。」

「それに仮にそんな依頼が来たら真つ先に俺とタカミチさんを現場に行かせるさ。」

まあ俺が戦ってきたのは、鬼とか人間とかだけだね。幻想種なんて戦う以前に見たことないんだよね。

見栄張ってごめんねネギ君。

「それよりも早く内容見た方がいいと思うぞ？」

「あ、そうですね」

学園長の書いた手紙としばらく睨めっこしたあと

「な、なんだ。大したことなさそうですね。良かった」

「…ネギ君、一応参考になるだろうから言っておくよ。1・A…今の2・…なそのクラス順位がワースト1だった」

「は、ははは…だ、誰だって一度くらいビリになることくらいありますよ」

「それが一度だけなら良かったんだがな。」

ネギ君の顔が段々ひきつってきた。自分のなさねばならない課題がどれほどのものかようやく理解したようだ。

「ぶっ、安心しろネギ君。俺も手伝う。」

「本当ですか!？」  
「ああ、だからネギ君、補習用のプリント余計にコピーしてくれ、俺は抜き打ちテストの作成をやる。教室に集合な。」  
「はい!！」  
ネギ君は今では満面の笑みを浮かべていた。俺が手伝うって言ったのがそんなに嬉しかったんだろうか？

補習をやらせるまえに2 - に抜き打ちテストをやらせた。その抜き打ちテストで赤点のものまたは、赤点ギリギリだったものを残らせ補習をやらせていた。

「…すぴ〜…」

「…」

ペチン

寝ている明日菜に定規で叩く。

「ひゃっ!?!…もうなによ!?!さどにい」

「今は補習をする時間だぞ。ほらキリキリ、ペンを動かせ」

「え〜だつて〜」

俺は持っていたシャーペンを思いつき握って粉々にした。

「まだ…何か…?」

すこしドスをきかせて明日菜をビビらせる

「う、やるわよ!やればいいんでしょ!?!」

しばらくしてから教室にしずな先生が来た。相変わらずいい体してまんなくなど心の中ではスケベな事を考えていた

「しずな先生?どうしたんです?」

「敏志先生、ちょっと」

手招きをされたので近付くと、しずな先生が急に耳元でささやいてくる。

「学園長から伝言を預かってきました。ネギ先生への助力は禁止する」と

「あ、はい。わかりました。」

しずな先生がそれとつて言っつて話を続けてきた。

ちよ…いつまでおっぱいに密着してればいいんですか！？興奮このままじゃ抑えきれないんですけど！？

「学園長から直接お話があるようです。」

「学園長が俺に？わかりました。それとさっきの伝言ネギ君にも言っつておいてくれませんか？」

「はい、わかりました」

なんだろ？まだ言い忘れた事があんのかな。まあ学園長ももう歳だしな

コンコン

「失礼します」

「おお、来たようじゃのう。実は敏志君に頼みたい事があつての」

「頼み？仕事ですか？」

俺が此処で言つた仕事つていうのはデスクワークとかそういうのではなく裏関係の方だ。実名の方は、あまり知られていないが偽名の方は、かなり有名なのだ。実際メディアに取り上げられたこともあつた。勿論名前だけな、顔写真まで出てたらリアルでFBI辺りに捕まつて極刑行きだろ。まあそれだけの事をやってきたんだ。

例えば犯罪を犯した官僚を殺したり犯罪組織を潰す為に組員を皆殺しにしたりと結構ダークな事をやってきた。

それを知つてるのは学園長とエヴァンジェリンとタカミチさんの三人だ。

つと話がそれたな。

「うむ、実はこのう。また悪い魔法使いが潜伏しているという報告が来たんじゃない。」

そう言つてまた、地図に円が書いてある紙を貰つた。

「工場団地ですか？」

「うむ、最近までは、無人だったんじゃないが。1ヶ月前に買い取つた

らしい」

「1ヶ月前に?...何かありますね。」

「うむ出来るだけ迅速に頼むぞい」

「はい。...ああ、そいつらはどうすれば良いですか?」

「...敏志君に任せる」

なるほど、こつちの方が悪質なことをやってるのかならやることは一つだ。

さあて仕事の時間だ。

気づけば辺りは暗くなっていた。単に探すのに手間取ったのと学園をでるときにすでに夕方になってるのが原因だった。

「平和な日常に浸かりすぎたかなこれは」

魔帆良でふざけていたのが俺の本性なら人を殺すときの俺はいろいろな感情を削ぎ落とした仮面を被っているのだろう。

「ハッ!」

堅牢な扉を粉碎する。中にいた連中はアポなしで来た珍客に驚いているようだ。

「その奥に置いてある大砲みたいなのが切り札か?」

「誰だお前は!?!」

「言う必要はない。お前等は此処で死ね」

「なあ、アイツ魔帆良の刺客じゃないのか!?!」

余所見をしている馬鹿に近づくと

「余所見をするな」

バコオ!!!

そいつの顔面をぶん殴る。それに耐切れなかったのか顔面がボールのように跳ねながら転がっていた。

頭を失った体は血飛沫しながらその場に崩れ落ちた。

「ヒイ!?!」

「ひ、人殺し...!」

「ツチャー！！」

近くにいた男2人の動脈部分を掴みそのまま引きちぎる。

「これで3つ後は…8つか」

腰を抜かしたのかしゃがみこんだ男に飛び交った瞬間

「ツガアン！！」

「ゴフツ！！」

体に激痛が走り口から大量の血が吹き出る。

「ガッ…グッ！？なん…だ？」

俺はそこで大砲のようなものの口から煙が出ていることに気付く。

「波動キャノン…実験は成功したな！！」

「よ、よしまずはこの町で試してみよう」

俺が死んだと思ったのか奴らは興奮気味になりながら話していた。

「町の人達を…犠牲にだと…？愚かな…！！」

俺は怒りで体の痛みを忘れて立ち上がる。

「アイツまだ生きて…」

「じゅ、準備しろ！！」

「流派…東方不敗が最終奥義」

体を気が循環していく

「貴様等、塵一つ残らず消滅させてやる。そのガラクタ共々なあ！

！！

両手に気を限界まで溜める。躊躇いは無い今まで同様やることは変わらない。

「石破天驚拳！！」

人が原始レベルまで分解され消え去る。それはあの波動キャノンとか言っつのも例外では有るまい。

そこに残ったのは焼け野原だった。今の俺は心ここにあらずといった感じでぼーっとしていると遠くからサイレンが聞こえる

「逃げなきゃな」

その場を全速力で逃げ出した。

そしてそのまま学園に入る。

「学園長…終わらせてきました。って刹那ちゃん？」

学園長室に入るとなにやら刹那ちゃんが学園長に対して怒っているようだった

「敏志さん？どうしてここに？」

「ちよつとな」

学園長は暗い表情をしながらそうかとだけ言ってきた。俺のやったことに察しがついたという事だろう。

「これが報酬じゃ」

そう言つて諭吉の束を2つ俺に寄越した。

「なっ！？こんな貰えませんよ」

「もう一つは入院手当てじゃ。お主怪我しとるじゃろ」

「えっ？本当ですか敏志さん！？」

気付かれてたのか。でも大したことないって言ったら

「入院してください！！」「…はい」

こうして俺は入院する事になった。

## 第八話

退屈な時ほど生き苦しいものはない。いやそれは、平和な時を謳歌しているからこそ、そんな事が言えるんだらうな。

「今日もいい天気だな〜」

ホントに憎々しいほど天気がいい。

ポフツ

「っ……」

起こしていた体を病院のベッドに預ける。だが勢いがあつたせいか少し痛みがあつた。

「それにしても刹那ちゃんが学園長室に居たのは図書館島に行ったのか達をどうするのか聞くためだったのか……」

ここでタンじゃなくてちゃんと言つたのは誰かに聞かれてんじゃね？とチキンハートでびびりな俺が勝手に思ったがゆえに言い換えただけである。

「菌痒いな俺の知らぬ所でストーリーが進行してるなんて。あゝ見に行きたいな〜でもな〜刹那ちゃんとかにバレたら恐いしな〜」  
なんて頭を抱えていると

コンコン

「?は〜い、いますよ〜」

ガラガラ

「!?!?…どちら様ですか?」

俺はやつとの思いで平静を保つ事が出来た。

なんでかって?前に裏関係の話したたる?俺は、そういうのを撲滅する組織に入っていてな今は俺がリーダーをやってる。

といつてもボスの出した命令を遂行するために陣頭指揮してるってだけだけだな。

で、俺の目の前にいるこの女は金髪の長髪で切れ長の目をしている。彼女には内緒にしているがスカイブルーの色をした目が気に入って

いた。

また話が逸れたな。この女は、潜入捜査と暗殺を得意としている俺の同業者だ。

確か魔帆良に来る前はアメリカにいと聞いていたが：

「随分な言い草ね。折角心配して敏志のお見舞い来てあげたのに。

それとも“エリン”のほうが良かった？」

「よしてくれ。いくら平和惚けしている日本国といってもテロリストで大量殺人鬼だってバレれば即刻首が飛ぶよ“アラン”」  
勿論文字通りの意味で。

一応言っておくとアランっていうのは彼女のコードネームだ。さっき言われたエリンっていうのが俺のコードネーム

「あら？私の事はそっちで呼ぶのね」

「それしか、知らないからな」

「それは、ごめんなさい」

アランがおちやらけたように言いながら持っていた花束を花瓶に水挿しした。

「敏志、貴方も嗅いでみない？とても良い匂いがするわよ」

花瓶に入った花束をずいっと渡してくる。

「いらぬと言おうとして止めた。

なぜなら一輪の花びらにパソコンにさすメモリーカードが置かれていたからだ。報告もかねてって事か。俺はここで初めてアランの真意を知った

「気付かなかつたよ。とても良い匂いだね」

メモリーカードの入った一輪の花を花瓶から抜き匂いを嗅ぐ振りをして回収する。

「さーと、私はそろそろ帰るわね」

「どうやら用はそれだけだったらしい。

俺の心配は二の次だったようだ。

「仕事が一番、命は二番ってことか？」

「気をつけてな」

ボタン

扉の閉まる音がする。だが急に扉が開いた。

忘れ物か？そう思ったが出てきたのは、想像とは違う人物だった。

「こんにちは敏志さん。お見舞いに来ました」

刹那タンだった

「刹那ちゃんか、よく来たね」

「さっきの女性は誰だったんです？」

「ああ、俺の友達でね。」

「同業者の方ですか？」

「まあ、似たようなものかな？」

彼女は別に特殊な能力があるわけじゃないからな。なんて言ったらいいんだろうか？

それにしても刹那タンを見ると学校が終わってすぐ来たようだ。そうだ学期末テストも近いんだし数学でも教えてやるか

「刹那ちゃん数学の教材と筆記用具出してくれ」

「え…とっ、大丈夫です。心配いりません」

「どの口で言ってるんだか。居残り補修受けてたたる刹那ちゃんは。」

「だ、大丈夫ですよ」

「ほう、なら今度のテストは80とか90は採れる自信があるんだな？採れなかったら三年になるまで居残り補修させるぞ？」

「そ、それでは部活に行けません。顧問の先生に怒られます」

「なあに安心しろ剣道部の顧問は、話のわかる人だよ」

すでにぐうの音も出ないようだ。刹那タン、カワユス

「諦めて、素直に勉強しようぜ？」

渋々といった感じで教材と筆記用具を出してくる。

うんうん素直でよろしい

「え〜とじゃあこのxの値を求めてみようか」

刹那ちゃんは物覚えが悪くないようで教えた事を少しずつ覚えていくてくれた。

ガラガラ

「思ったより楽しそうじゃないか」

「お見舞いに来ました」

真名タンと千鶴タンがお見舞いに来てくれるとかマジラッキーだぜ。それにしてもこれはまた珍しい組み合わせだな

「お、よく来たな。2人ともどうだいこれから勉強会でも」

「丁度解らないところがあつたんです。お願いできますか？」

「私もお願いしようかな」

「OK任しんしゃい」

正直三人で勉強するにはテーブルが狭すぎたな。やりずらそうだ。

「ここじゃなくて、食堂でやるうか。三人だときゅうぎゅうで集中出来ないだろ」

そういつてベッドから降りる

「大丈夫ですか？」

心配をしてくれてるんだろ。千鶴タンが俺を支えてくれる。

「大丈夫だ。支えられるほどじゃない」

「敏志さんはすぐ無理をするから信用出来ません」

今度は刹那タンが反対側を支えてくれた。

ちよっ…両サイドからの大小の胸を押しつけてくるとか入院中でオナ禁してる俺に対しての当て付けですか！？

「ふふ、諦めてそのまま連行されるしかないな」

「止めてはくれないのか？」

「ああ、そのほうが面白そうだしな」

「…さいですか」

六時になるまで食堂で勉強し三十分ぐらい雑談し解散となった

カタカタカタカタ

キーパンチをする音が室内に響く

「さてと、報告書にはなんて書いてあんのかな？」

メモリーカードを挿入してファイルを開く

「アメリカの方は特に問題無しか。…ん？」

もう一つファイルがあることに気付く。そこには指令書と書かれていた

「え〜と何々…日本の政治家が国会議事堂に集まる？また何か会議でもするのか？それでえ〜とそこに集まった政治家を駆逐しろ？期日は学園祭が終わった一週間後か…」

別のファイルに政治家の名前と汚職した内容が書かれていた。

「ふむ…しかし困ったな。会議中の国会議事堂に入るのはなかなか困難だな。マスコミの連中に顔を見られるのは出来れば遠慮したいが…」

そこで初めてテレビを点けっぱなしにしていることに気付きテレビを消そうと手を伸ばして止めた。

なぜならテレビにNASAが新しく作った衛星を飛ばすと発表していたからだ。

しかも飛ばす日が修学旅行が終わる次の日だったからだ。

俺はここで一つの案が浮かんだ。それは他人から見れば非人道的なものだった。

俺はすぐさま携帯に手を伸ばしとある人物に電話をかける

「もしもし？俺だ、東山敏志だ。実は頼みたい事があるんだ。ああ

…うん…そうだ。それで作って欲しいのは…衛星に似せたレーザー砲だ。」

本来なら何を馬鹿なと鼻で笑っているだろう。だが“彼女”ならばできると不思議にも思っていた。

「ああ、後は頼む。」

電話を切りテレビとパソコンの電源を切る。そしてメモリーカードを抜き手で握り潰し粉々にする。勿論ゴミ箱の上で

「ふう…」

体を休める為にベッドに横になる。

「さてどうなるかな？」

俺の考えた作戦が今後どう影響を与えるのか俺は知りもしなかった。

## 第九話

今日もまた外を眺めながらボーっとしていたら

ガラガラ

俺を診察してくれた医者が入ってきた。

「おはようございます。今日は、どうしたんですか？」

「はい、おはようございます。実は、東山さんに伝えておくことがありましてね」

俺は医者からもう退院していいと言われた。

やっとかゝ案外長かったな。そんな事を思いながらそそくさと荷物を纏める。

「あ、そうそう今日は念の為休んでおいて下さいね」

「わかりました」

受付で退院の手続きを終わらした頃には既に昼頃になっていた。

「よゝし今日はマ ク行くか」

ダブルチーズバーガーとチキンフィレオとポテトのしと爽健 茶しを頼んだ。久しぶりに食ったもんだからうまいうまい。

明日は試験日だ原作通りならギリギリ間に合ってくれるはずだが…

「あつ！いつけね数学のテストの作成って俺の担当じゃん！」

学園長に電話することにした

トルルルルル

「もしもし？東山ですけど」

『おゝ敏志君か。どうかしたのの？』

「今年の数学のテスト作成って俺の担当じゃないですか。だから今からでも作るうかと」

「そのことなら心配しなくても大丈夫じゃ。なぜなら俺が作っておいたからの」

「本当ですか？すみません迷惑かけました。」

「フオツフオツフオツ、気にせんでええぞ。」

「はい、ありがとうございます。それじゃあ」  
通話を終えた。そうかやってくれたのか。だったら明日は学園長に何か御礼の品でも持って行くべきだよな。  
そのあとは、特にやることも無く寮長室でテレビを見ていた。

そして次の日俺は職員室にいた。

「ネギ君達遅いな。大丈夫なのか？」

俺は知らず知らずの内に焦っていた。原作にもあったとはいえ、いざ直面すると焦らずにはられない。

「東山先生、チャイムが鳴る前に教室に行ったほうが良いですよ。」

「あ、はい。」

教室に来ると相変わらず騒がしかった。だが明日菜達がいらないせい  
か騒がしさは1、2割減だった。

「静かにしろお前ら。テスト配るぞ」

教室内にはやはり居なかった。

「早く来てくれればいいのに」

「先生」

「ん？どうした」

「明日菜達は、まだ来ないんですか？」

「来るさ、そう信じよう」

トルルルルル

試験中の教室に携帯の音が鳴る。

来たか！

「ごめん、続けていいよ」

廊下に出て電話に出る

「もしもし東山です」

『先生、ネギ先生達が来ました。』



ってんだっけか？アレ  
…よし、2 - Aの採点終了。お次は、え〜と？2 - Bね

「ふう…終わった」

流星にぶっ続けでやるのは、疲れるな。

固まった体を解した後、採点したテストをクラス別に分けてファイ  
ルに仕舞う。

「お先に失礼します。」

「お疲れ」

「お疲れ様」

「お疲れさん」

「うわ〜真っ暗だなあ。集中し過ぎると辺りが見えなくなるのは考  
え物だな」

帰路につこうとしたら

トルルルルル

誰だ？

「はい？」

『もしもし儂じゃが』

「学園長？どうしたんですか」

「うむ…実はの関西からまた来ての」

「また…ですか？ハア…了解今すぐ現場に行きます」

また鬼かしかも今日に限ってかい。全く困ったもんだな。

それにしても今日の事然り学園長に頼まれた仕事って原作に無いこ  
とだよな。まあ俺のようなイレギュラーいんだからしょうがないか

現場に行くと鬼とか鳥人間とかがウヨウヨいた。

「大杉だろ常識的に考えて」

「ん？なんや？兄ちゃんそこどきや怪我するで」

「敵同士なのに優しすぎないですか？」

「なんや、兄ちゃん敵なんか」

「ああ」

「だったら相手せなアカンなあ。悪く思わんといてな」

「すう…はあ…ガンダムファイター…レディーゴー…！」

俺は弾丸の如く鬼に迫る。

「せやあ…！」

鬼の顔面に拳を叩きつける。すると鬼は音もなく消える。おそろく還ったのだらう

「お前ら囲い込んで袋叩きするんや…！」

鬼達は見事なコンビネーションで俺を中心に円を描くように囲む

「これならどうや？」

「ふっ…勝つさ。なんせ俺は…主人公だから…！」

「そういうのは、小物かやられ役が言うもんや…！」

「上等…！」

一斉に襲いかかって来る。だが一対多こそが俺の本領発揮よ…！」

「よいしょ…！」

俺は寄つてきた鬼2人の腕を掴んだ

「食らえ…！ゴオオオオオドラツシユタイフウウウウン…！」

ドガガガガガ

肉の潰れる音、骨が碎ける音が連続して流れる。

「オラオラオラ…！…つと還つちまつたか」

掴んでいた鬼が耐えきれず還ってしまったようだ。まあいいや大分減らせたし

「…兄ちゃんホントは人の皮被った化け物ちゃうんか？」

「失礼な！ただハーレムな事をムフフと考えてる俺に対してなんてことを…！」

「ハッハッハッ、お前ら行くで？オラアアアア…！」

「ハッハア、そうこなくつちな。セイヤアアアア…！」

鬼が棍棒を振る。それを避けるそして他の奴が追撃をかける。

「ハッ」

後ろに大きく飛び流派東方不敗の奥義を使う!!

「超級霸王電影弾!!飛び散れ!!」

ズガガガガガ!!

鬼を一匹残らず一掃し俺は空中に舞う

「爆発!!」

その森にはさつきまでの騒がしさはなく静寂だけが支配していた。

「学園長?一応仕事終わらせたんで帰りますね」

俺は何の気なしに空を見た

「月が綺麗だな」

運命の時は刻々と確実に近付いていた:

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6583t/>

---

俺主人公だからネギまの世界行ってきたしww

2011年10月5日02時34分発行